

【ミニ企画展解説シート】

第176回ミニ企画展

大津の天台真盛宗寺院の寺宝

令和4年11月1日（火）～12月4日（日）

8世紀後半に比叡山延暦寺が開創されて以降、大津の地は我が国における仏教文化の中心地のひとつとして多くの神社仏閣が造営され、我が国屈指の質量を誇る文化財が伝来しています。当館は開館以来、それら仏教文化の調査や研究を行い、その成果として毎年、ミニ企画展において広く市民に紹介しています。

さて、今回のミニ企画展は、大津市内の天台真盛宗寺院に伝わる寺宝がテーマです。大津には天台真盛宗の総本山である西教寺があり、その末寺も21カ寺が知られています。当館では現在、それらの寺院に現存する宝物の悉皆調査を進めているところで、今まで知られていなかった文化財をすでに多く確認しています。さらに、本年11月2日から8日まで、「不断念仏相續十九萬日大法会」が西教寺において厳修予定で、真盛上人の活動にあらためて注目が集まると考えられます。本展ではこの大法会にあわせて、市内の天台真盛宗寺院に伝わる寺宝の一端を紹介します。

No.1 地蔵菩薩立像 1軀 平安時代（11世紀） 和邇北浜・真光寺蔵

本堂の脇壇に伝来。頭部は円頂とし、体部は胸を大きく開け、覆肩衣（ふっけんえ 右肩から右袖に掛かる）と衲衣（のうえ 袈裟 腹前から左肩、袖にみえる）、裙（くん 巻きスカート）をつけています。頭体幹部をヒノキの一木から彫出していますが、背面や袖、足元は近世の後補となっています。特徴的なのは、着衣の衣文をほとんど表さないところです。それは、木からホトケの姿が徐々に現れつつある様子を表しているのかもしれませんが。丸顔に眠そうな相貌は、平安時代後期に仏師定朝が完成させた定朝様（じょうちょうよう）と近似することから、11世紀後半頃の造立と思われる。

木造古色 寄木造 彫眼 像高62.0cm

No.2 千手観音坐像 1軀 南北朝時代（14世紀） 和邇北浜・真光寺蔵

本堂脇陣に伝来。厨子入りで、岩座上の金色の蓮台に座る千手観音です。表面は金泥彩とし、着衣はさらに繊細な截金文様と盛上彩色を施しています。光背は薄い銅板を切り抜いたもので、精緻な文様を表しています。粘りのあるやや大ぶりの衣文や、波打つ天冠台の表現、方形を感じさせるずんぐりとした体躯のプロポーションなどは、南北朝時代に流行した作風です。一方、この時期に一世を風靡した、院派の正系とはやや異なる相貌を持ち、造立仏師については今後の課題です。厨子を含め、造立当初のものが保存よく残っています。

木造金泥・截金 寄木造 玉眼 像高17.5cm

No.3 神像坐像 1軀 平安時代（11～12世紀） 大江・西徳寺蔵

本堂脇壇に安置され、伝来は不明です。脚部を欠失するなど、損傷が激しいものの、背面腰

部では衣のたるみが確認できるため、俗形で表されているようです。一方、右腕外側には袈裟の衣端のようなものが見え、剃髪していることからすると、俗形と僧形を組み合わせている可能性もあります。

特徴的なのは、鼻や耳の痕跡が全く無く、面貌を表現しない点や、顔に節を残す点です。神像独特の表現が窺える好例と言えるでしょう。ある程度の体軀の量感があることから平安時代、10世紀末～11世紀前半頃の作とみられます。

木造素地 一木造 彫眼

No. 4 鬼大師坐像 1 軀 江戸時代 (18世紀) 大江・西徳寺蔵

慈恵大師(良源 912~985 第18代天台座主)が変身した姿とされる像です。ハンサムだった良源が内裏に参内した際、女官たちが大騒ぎしたので、酒宴時に大師の口がさけて鬼の風貌に変わった、という伝承に基づいた姿です。これは邪念を降伏する姿といい、後に魔除けや厄除けのためにこの姿の護符が作られました。歯と舌をみせて口を大きく開け、酒宴時に口が裂けたという様子を思わせます。小像ですが、なかなか奇怪な姿にうまく彫られています。ちなみに、鬼大師を彫刻で表した作例は、全国的に見ても数例しか知られていません。

木造彩色 寄木造 玉眼 像高18.5cm

No. 5 飯綱権現倚像 1 軀 江戸時代 明和8年(1771) 大江・西徳寺蔵

飯綱権現(長野市飯綱山の山岳信仰の神)は、通例では、剣と羂索を持ち、くちばしと羽を持つ烏天狗の風貌で、白狐に立って乗る姿に表されます。本像は、大方の形姿は飯綱権現の通例に準じますが、くちばしが無く、白狐に乗らず岩座に座るところが異なります(このことは、風貌が似ている秋葉権現である可能性もあり、他に類例がないと珍しい姿だけに、詳細は今後の課題です)。西徳寺には飯道寺の遺物(No.9)が伝わりますが、飯道山は飯綱権現ゆかりであることから、本像も飯道山からもたらされた可能性があります。墨書銘により、明和8年に江戸芝口の仏師西村采女が造立したことがわかります。

木造漆箔・彩色 寄木造 玉眼 像高28.7cm

■西徳寺・飯綱権現像の銘文

No.5の西徳寺・飯綱権現像には台座に「芝口三丁目/明和八卯十二月吉日/大佛師西村采女作」という銘文が記されていました。また厨子底面にも「江戸芝口三丁目大佛師西村采女作」とあり、明和8年(1771)に江戸の仏師西村采女(うねめ)が造った基準作であることがわかります。

この西村采女という仏師は、神奈川・小田原市玉泉寺の如意輪観音像や東京・青梅市真浄寺不動三尊像を制作しており、その事績は関東に集中しています。江戸時代の仏像の研究はあまり進んでおらず、詳細は今後の課題ですが、なぜ本像が西徳寺に伝来しているのか、飯道山との関係はどうなのかなど、興味の尽きない作例と言えるでしょう。

No. 6 仏涅槃図 1 幅 南北朝時代 (14世紀) 小野・上品寺蔵

やや縦長の画面に、釈迦が宝台上で右脇を下にして横臥しています。右手を手枕しながら、肉身は肉色で赤色に金泥で円文をちらす衲衣(のうえ)をつけ、足はハの字に開いています。周囲に沙羅双樹(さらそうじゆ)が生え、釈迦の周りには弟子たちや菩薩らが、さらに画面下方には哺乳類や鳥類、爬虫類、虫類、鳳凰、迦陵頻伽などの空想の生き物たちが嘆き悲しむ様子を描いています。緑青や群青の寒色と、朱や丹の暖色の配色が見事で、図像も南宋時代の涅槃図の影響

がみられます。仏画が多く現存する大津屈指の古い涅槃図です。

絹本着色 縦185.5cm・横163.5cm

No. 7 虚空蔵菩薩像 1幅 室町時代(15世紀) 小野・上品寺蔵

「虚空蔵」はサンスクリット語の「ākāśa - garbha (虚空の母胎)」を漢訳した語で、「宇宙のように無限の智恵と慈悲を持った」菩薩である虚空蔵菩薩は、無限の智恵と慈悲によって衆生に幸福を授ける菩薩であるとされています。

画中の虚空蔵菩薩は、右手に剣、左手に宝珠を持ち、頭に五智如来を象った宝冠をかぶっています。そして台座に坐し、周囲からは雲気が湧出しています。本画はよく知られる「虚空蔵求聞持法」の本尊とは姿が異なり、いわゆる宋風仏画の形式を踏襲しているところに特徴があります。

絹本着色 縦88.5cm・横38.2cm

No. 8 赤童子像 1幅 室町時代(15世紀) 小野・上品寺蔵

箱書きにより、「赤童子」と呼ばれる赤色の護法童子像です。護法童子は、高僧に従って様々な仕事をする存在です。その姿は、頭上に火炎宝珠の冠をのせて巻髪とし、腰を曲げて右手を屈臂して杖を持ち、その上に左肘をのせて頬杖をついて岩座上に立っています。基本的な姿は、不動明王につく制多迦(せいたか)童子と同じですが、杖の上で頬杖をするのは、南都では「春日赤童子」、比叡山では「葛川(かつらがわ)護法」が知られています。本像がそのどちらかであるかは不明ですが、いずれにしても中世にさかのぼる作例は少なく貴重です。

絹本着色 縦104.7cm・横35.9cm

No. 9 慈恵大師二童子像 1幅 江戸時代(18~19世紀) 大江・西徳寺蔵

画面中央に大きく、独鈷杵と念珠を持つ慈恵大師(良源 912~985 第18代天台座主)と、その手前左右に二童子を描いています。この三尊形式は、根本像である比叡山延暦寺横川の元三大師堂本尊と同じ姿で、絵画の慈恵大師の基本的な姿です。一方、本画は周りに天狗の姿をした護法を2体加えており、坂本・盛安寺本以外に類例の知られないとても興味深い作例です。箱蓋墨書銘によれば、もとは飯道寺(甲賀市)の大師堂本尊でしたが、19世紀の西徳寺の僧、法道によってもたらされました。今は無き甲賀の大寺、飯道寺の遺物として貴重です。

絹本着色 縦60.5cm・横30.6cm

■真盛上人の六字名号

「六字名号」とは、極楽浄土の教主、阿弥陀如来に帰依する言葉「南無阿弥陀仏」の6字のことで、これを唱えれば極楽浄土に往生できるというものです。称名念仏を重視した真盛上人は布教期間が短かったのにもかかわらず、多くの自筆の「六字名号」を残しています。

さて、その署名の仕方を見ると、大きく「真盛」と「真盛上人(花押)」の2種類がみられます。真盛上人は、文明18年(1486)5月27日、後土御門天皇より上人号を賜りました。ゆえに、それ以前の署名は「真盛」であり、以後は「真盛上人(花押)」と自署するようになったようです。このことから、署名の仕方から緩やかに書写された年代を推察することが出来ます。

No.10 六字名号 真盛上人筆 1幅 室町時代(15世紀) 栗原・慶福寺蔵

基本的に草書体の六字名号ですが、最後の「佛」だけは、他の楷書体の作例と同じ字で書かれています。上人号で記されていないので、上人号を賜った文明18年(1486)5月27日以前に揮毫されたものとわかります。なお、本作は慶福寺の檀徒の某家に長らく伝えられた宝物で、近年寄進されたものです。

紙本墨書 縦79.6cm・横19.4cm

No.11 六字名号 真盛上人筆 1幀 室町時代(15世紀) 和邇北浜・眞光寺蔵

縦が約46センチと、流布している真盛上人の六字名号とくらべ、半分ほどの大きさです。このような小さい名号はまれにみられ、信者向けに真盛上人が揮毫したものとされています。文字は太字によって楷書体で揮毫され、左下に真盛上人(花押)とあるので、上人号を賜った文明18年(1486)5月27日以降のものとなります。もともと伊賀の西連寺(三重県伊賀市 真盛上人入滅地)に伝わったもので、近年眞光寺にもたらされました。

紙本墨書 縦46.2cm・横14.4cm

No.12 阿弥陀三尊名号 真盛上人筆 1幅 室町時代(15世紀) 大江・西徳寺蔵

阿弥陀如来だけでなく、観音菩薩と勢至菩薩の両脇侍を左右に加えた三尊形式の名号です。このような阿弥陀三尊の名号はあまり現存例がなく珍しいもので、近隣では西教寺禅明坊に真盛銘のものが、西教寺實成坊に真盛上人銘の作例が残っています。本作は、真盛上人(花押)の自署があり、文明18年(1486)以降に揮毫されたものです。力強い作風で、画面いっぱいに太字の楷書で大きく阿弥陀の名号を書き、自署は小さめに書かれています。

紙本墨書 縦91.9cm・横26.8cm

No.13 十念名号 眞光上人筆 1幅 天文19年(1550) 和邇北浜・眞光寺蔵

画面の上部に「南無阿弥陀仏」と六字名号が10行にわたって並び、中央には「眞光上人」の名前と花押が大きく書かれています。これは「十念名号」と呼ばれるもので、宗祖眞盛上人が、直接対面できない人のために作ったと言われています。この軸の前で、上人に直接面しているかのごとく名号を称えれば、上人から「十念授与」を受けたことになったのです。本作は、眞光寺の開基で、西教寺第七世の眞光上人(1493~1572)直筆の名号です。眞盛上人以外の十念名号はなかなか残っておらず、年紀もあり貴重な作例です。

紙本墨書 縦94.0cm・横32.0cm

ミニ企画展解説シート

第176回ミニ企画展

大津の天台眞盛宗寺院の寺宝

大津市歴史博物館 〒520-0037大津市御陵町2-2

令和4年11月1日発行

ミニ企画展「大津の天台真盛宗寺院の寺宝」展示作品リスト

No. 1	地藏菩薩立像	1 軀	平安時代	和邇北浜・真光寺蔵
No. 2	千手観音坐像	1 軀	南北朝時代	和邇北浜・真光寺蔵
No. 3	神像坐像	1 軀	平安時代	大江・西徳寺蔵
No. 4	鬼大師坐像	1 軀	江戸時代	大江・西徳寺蔵
No. 5	飯綱権現倚像	1 軀	江戸時代	大江・西徳寺蔵
No. 6	仏涅槃図	1 幅	南北朝時代	小野・上品寺蔵
No. 7	虚空蔵菩薩像	1 幅	室町時代	小野・上品寺蔵
No. 8	赤童子像	1 幅	室町時代	小野・上品寺蔵
No. 9	慈恵大師二童子像	1 幅	江戸時代	大江・西徳寺蔵
No.10	六字名号 真盛上人筆	1 幅	室町時代	栗原・慶福寺蔵
No.11	六字名号 真盛上人筆	1 面	室町時代	和邇北浜・真光寺蔵
No.12	阿弥陀三尊名号 真盛上人筆	1 幅	室町時代	大江・西徳寺蔵
No.13	十念名号 真光上人筆	1 幅	天文 19 年 (1550)	和邇北浜・真光寺蔵

※展示替えなし。